

チャップスの歴史は相当に長く、Japanese / チャパレホスというスペイン語が語源になっている。17世紀スペイン人の一部にカウチョと呼ばれる農業移民がいた。いつしかポルトガルや南米に渡り流浪の生活の中で農業をやめ、大繁殖をしていた野生の馬や牛を追って生計を立てていくようになる。その中にアメリカに渡りネイティブアメリカンと独自の方法で語り、恋をし、ネイティブに溶け込んでいった者が少なからずいたらしい。そのカウチョたちが騎乗する時に灌木の枝などから足を守るために装着していたのがチャップスの始まりのようだ。

余談だがカウチョの中には定住をよしとせず、馬や牛を追いつつ生活を営んで生活の糧とし、肉を食べ、足りない栄養をマテ茶で補い、夜はボンチヨを着てキヤを奏で、旅を日常とした者たちがいたらしい。チャップスの始まりだった彼らには、バイカーとしてのスリッツの原点が隠されていたのかも知れない

と思うのは夢を見すぎだろうか。カウチョからネイティブへ、同時期にカウチョたちに伝承される。カウチョと同じく野生の動物を追つカウチョイにチャップスが受け入れられたのは、その使用価値を考えれば当然である。その土地に根ざしていたとはいえず、野生の牛や馬を追えばその日に帰ることができないかもしれないカウチョイたち。過酷な労働にも耐えられると同時にアウトドアでも適応できなければならぬ。チャップスは寒さを凌ぐだけではなく、焚火の横での寝床としても活用されていたのかもしれない。チャップスにも何種類かの形状があり、丈の短いチンクスや、より簡単な作りで後にロデオなどで派手な装飾がつけられるパッドウイング。後年になりフラスナーで開閉式のシヨットガンができ、それが現在のバイカーチャップスにつながっている。ではなぜバイカーが好んだのか。寒さを防ぎキアとしてはもちろん、この言葉に軽さを感じるが、これな

くして大多数に受け入れられることはない重要なファクター。"ファッショニ性"、そして気温に合わせて着脱ができる"利便性"、そして何よりも大切である"身を守る"こととしての"安全性"、という役割も果たす。実にバイカー向けのモノだからだろう。

写真の使い込まれたチャップスはハンソンのもの。創立以来安全性に重きを置いたバイカーズキアを多く出している。その結果として多くのレースの場においてハンソン製品の着用率が高いという実績を残している。雨に打たれ、寒風にさらされ、時には直射日光を浴びてバイカーの足を守るチャップスは冬の間酷使される。それでも何十年も簡単なメンテナンスだけでその使命を果たしている。

働き者のチャップスは古より変わらぬ、2枚の革をベルトでつなぎ合わせただけの誰でも作れてしまいそうなシンプルな作りのままで、革を足に巻きつけて馬を駆った頃とほとんど変わりが無い。



バイカーが選ぶ不変のモノ
[Vanson Chaps]

足を通してジップする。
身も心も引き締まる!!



後ろは紐で結ばれ、前はベルト。調節のためもあるが、実にシンプルなこの作りがバイカーを夢中にさせる。このままでもカスタムしても、それはバイクと変わらない。



バンソンMCHP 6万1000円
サイズ: 18~27 (腿の太さ)
チャップスの定番中の定番。舶来堂: 03-3833-2233

